

## 【論 文】

## 大学進学における相談相手の選択に関する日中比較研究

－相談頻度を中心に－

林 如玉<sup>1)</sup>\*, 倉元 直樹<sup>2)</sup>

1) 東北大学教育学研究科, 2) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本研究の目的は大学進学における様々な相談相手との相談頻度を分析し、日中両国の高校生の進路選択プロセスにおけるステークホルダーの異同について明らかにすることである。質問紙を用いた調査を行い、相談頻度の回答から進路選択時に相談する相手を分析したところ、日本の生徒は「母親」「高校教師」「友人」の順で頻繁に相談していた。一方、中国の生徒は頻繁に「友人」「母親」「父親」と相談していた。さらに、それぞれの相談相手との相談頻度について、「国」「性別」「学年」を要因とする3要因分散分析を行った。その結果、2次交互作用は見られなかった。国の主効果は「家庭教師・塾・予備校」を除き、全ての項目で有意であった。うち4項目「父親」「兄弟姉妹」「先輩」「高校教師」で、国と学年の一次交互作用が有意で、2項目「高校教師」「母親」で国と性別の一次交互作用が有意であった。日本の生徒は中国の生徒より頻繁に「母親」「高校教師」と相談し、中国の生徒は日本の生徒より頻繁に「友人」「父親」「兄弟姉妹」「先輩」「その他の家族・親戚」「家庭教師・塾・予備校」と相談する傾向が見られた。背景要因として、文化の違いや高校における進路指導体制の差が考えられる。

## 1. 問題と目的

## 1.1 問題

アメリカの教育社会学者・高等教育研究者マーチン・トロウによれば、高等教育の発展段階は「エリート段階」「マス段階」「ユニバーサル段階」の3段階に分類される(Trow, 1973=1976)。

日本の高等教育はユニバーサル段階に突入して久しい。文部科学省の「学校基本調査」によれば、平成30(2018)年度の日本の高等教育機関(大学・短大)進学率は54.8%で過去最高に達した。一方、中国教育統計年鑑によれば、2018年中国の高等教育機関(大学・短大)進学率は48.1%に達した。中国の高等教育もユニバーサル段階に近づいている。高等教育が大衆化した現在、日中両国の多くの若者にとって、大学進学は自分の将来の身近な選択肢となっていることに大きな違いはない。進学先となる大学の選択が人生の大きな分岐点であり、若者の心を悩ます大きな問題であることも日中両国で本質的には同じだろう。

一方、日中の大学入試制度には違いがある。まずは、日中両国の大学入試区分について説明する。日本においては、一般入試<sup>1)</sup>以外に1972年度入試で推薦入試<sup>2)</sup>が導入されて拡大し、1990年度に導入されたAO入試<sup>3)</sup>も2000年度入試の国公立大学の参加により拡大してき

た。2019年度入試では、約47%の新入生がこの二つの入試区分で大学に入学している(倉元・尹, 2020)。それに対し、中国の大学入試は、現在ではほとんどが「普通高等学校招生全国统一考试」(中国の共通試験、以下「高考」と表記する)である。確かに大学の自主募集制度や推薦入試も存在しているが、募集人員はわずかにすぎない。石井(2020)によれば、中国では推薦入試が1984年度入試から導入されたが、資格要件は全国共通で厳格に決められ、全国で5,000人程度の規模に限定されてきた。1984年以前には、原則として、中国では個々の大学が課す個別試験が存在しなかった。2003年から、各大学が独自の方法基準で独自事前選抜制度を通じて学生を募集する制度も存在しているが、それを実施しているのはごく一部の大学である。2019年度入試の時点では、中国全国にある2,688校の普通大学の中、独自事前選抜を行う大学はわずか90校(3%程度)しかなかった。さらに、独自事前選抜の入学定員は原則総定員の5%までしか認められていない。

両国の共通試験<sup>4)</sup>における受験科目選択制度にも大きな違いがある。2019年度入試における日本の一般入試では、大学入試センターが提供する6教科30科目の中から、受験生が自分の希望大学の要求に従って受験科目を選択する方式である。中国の高考の試験科目は地域

\*) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 東北大学教育学研究科 lin.ruyu.p8@dc.tohoku.ac.jp

によって内容が違うが, 基本に「3+X」と呼ばれる方式を採ってきた, 3は国語, 数学, 外国語, Xは文科総合か理科総合である. 受験生が文系か理系を選択する.

上記のことから, 日本の大学入試制度は中国より多様で, 受験生は複数の受験機会があることが分かる. 中国で1年に1回のみ実施の現行の高考制度に「点数主義」「1回入試による過負担」など問題点があると指摘されている(中華人民共和国国务院, 2014). こういった現状を改善するため, 2014年9月3日に中国国务院から「入試・生徒募集制度改革の深化に関する実施意見」(以下「実施意見」と表記する)が公布された. 改革の内容としては, 「大学入試内容改革」「高校の教育改革」「試験負担の合理的軽減」「科目選択の自由」「多元採用」の5点が挙げられる. これらの改革措置によって, 中国の入試制度が多様化になり, 受験生が多くの選択権を持つことができるようになる.

入試制度が多様化すると, 受験生にとって大学に関する情報と入試に関する情報を知った上で受験することが重要となってくる. そのため, 高校における効率的, 計画的な進路指導の重要性が増してくる.

進路指導についても日中の差が見られる. 日本では入試制度の複雑化が進んでいるため, 進路選択のプロセスの中で得られる大学情報の重要性は, 以前から認識されてきた. 大学関連情報を提供する重要性は, 臨時教育審議会第1次答申(臨時教育審議会, 1985)で提唱された. 当時, 大学入試センターの「HEARTシステム」が導入され, 各大学には「情報通信ネットワークを活用」「一日体験入学」「キャンパスツアーの開催」等, 大学情報の提供が求められた. 現在では, 日本の大学にとっては「入試広報活動は欠かせないものとなっている」(倉元・泉, 2014). その結果, 現在の日本では, 受験生が大学情報を得る機会は豊富にある. 例を挙げると, 大学の進学説明会, オープンキャンパスなどが盛んにおこなわれている. さらに, 高校での進路指導は高校の校務分掌の一部となっている. 日本における各高校の組織形態には異同があるが, 基本的には進路指導を担当する組織が存在する.

それに対して, 中国の高校には, 進路指導を担当する組織は存在しない. そこからも, 中国の高校ではキャリア教育が十分に重視されてこなかったことが推測で

きる. 実際に, 中国の高校で進路に関する指導は十分ではないとの指摘がある(胡・村上, 2009). 林・倉元(2019)の研究では, 中国の高校生を対象に進路決定要因と情報把握程度について質問紙調査を行った. それによれば, 中国の高校生は大学受験が終わってから, 大学に関する情報を収集し始めることが示された.

一方, 日本では, 高校生の情報収集活動は「発信型情報探索活動」(インターネット, 大学ホームページなどを通して情報を収集する)と「対面型情報探索活動」(オープンキャンパス, 進路説明会などで直接大学の方と関わり情報を収集する)の2種類に分類される(寺下・村松, 2009; 倉元・泉, 2014). 日本の高校生は1年生から大学のイメージを把握するために活発に対面型情報探索活動を行う. 2, 3年生になると, 自分の関心がある大学に関するより詳細な情報を求め, 発信型情報探索活動による情報収集活動へと移行していく(林・倉元, 2020).

上記のことから, 日本における多様な高大接続の環境は中国より整備されてきたことが分かる.

高校生が自ら進学する大学を選ぶにあたり, 個人個人が様々な段階で様々な情報を集め, いくつもの意思決定を経て進学先の決定がなされていくと考えられるが, 国によるその特徴の違いは明らかになっていない. 本研究では, 日中両国の高校生の大学選択プロセスに関する全体像を描く第一歩として進学に関わる相談相手の問題を取り上げる.

### 1.1.1 中国の高校生の進路相談に関する研究

中国で行われた大学選択に関する研究としては, 以下のようなものが挙げられる. 戸ほか(2008)は大学に在籍している学生を対象に, 専門への満足度などについて質問紙調査を行った. 主に自分の興味関心で大学の専門を選択した学生の大学入学後の専門への満足度は高い. 一方, 主に保護者と先生の意見で専門を選択した学生の専門への満足度はわずか25%であった. この研究は進路選択の主体性と専門への満足度の関係について説明している. その一方で, 自分の興味関心で大学の専門を選択した高校生が誰にも相談せずに進路を決めたとは限らない. 大学選択プロセスにおける他者への相談行動を否定するものではない.

李(2003)によれば, 中国の高校教師には, 生徒の

教科学力さえ向上させれば生徒たちが自分で進路を決定するという意識が強い。さらに、生徒自身の職業感や職業興味や大学の学部、学科内容への適性などを踏まえた本来の進路指導が、計画的、継続的になされていないとされている。

尤（2014）は高校生を対象に、高校生の大学イメージや大学に対するイメージが高校生の大学選択に与える影響についてインタビュー調査と質問紙調査を行った。それによれば、保護者と友人の中の大学生が高校生の進路選択に大きな影響を与えているとされている。この研究で、高校生の大学イメージ形成の情報源に関して検討しているが、検討対象となったのは保護者と友人のみで、その他の相談相手については検討されていなかった。

### 1.1.2 日本の高校生の進路相談に関する関連研究

日本の高校生の大学進学決定要因ならびにその人的影響源に関する研究には測上（1984）の研究がある。測上は県立普通高校の進学希望者で高校3年生を対象として特定大学への進学希望動機を分析し、特定大学への選択動機がどのような人的影響源から影響を受けたかについて検討した。その結果、父親、母親、友人が、その順で影響源としての出現頻度が高かったとされる。一方、測上が調査を行った1982年から、日本の大学を取り巻く環境は激変し、大学入試制度も大きく変わってきたことに留意すべきである。

その他、進路選択に関わる親子関係の研究も数多く行われてきた。高橋（2009）は進路選択時の親子間コミュニケーションの特徴を測定する尺度を作成し、調査を行った。その結果、女子青年が母親との話し合いを避けることはアイデンティティ達成と負の相関があった。さらに、職業選択に積極的に取り組む女子青年は、父親の意見や期待に配慮することも示した。

さらに、一般社団法人全国高等学校PTA連合会による高校生と保護者の進路に関する意識調査結果報告（2019）では、対象となる高校生の82%が進路について話を保護者としていると回答し、「よく話をする」と「ときどき話をする」2項目の合計割合は女子（86%）が男子（79%）より高いことが明らかにされた。さらに、この調査で、高校生に進路を考えるうえで相談する人すべてを尋ねたところ、「母親」（85%）がトップ、2位に男子は「父親」（52%）、女子は「友人」（54%）が続く。

高校生に一番の相談相手についてその理由を書いてももらったところ、「母親」は自身に寄り添ってくれる態度や理解、具体的な進路選択への関与などが理由として挙がっていた。「父親」は話しやすさの他、進学・就職を経験した社会人として、体験談を踏まえた情報を与えてくれる「信頼感」がうかがわれる、とされていた。「友人」は、気軽に話せる相手であることや、同じ状況・立場にある「仲間意識」などの理由が挙げられていた。

## 1.2 目的

先行研究の多くは大学進学における相談相手として、保護者を中心に持ち上げ、その影響を分析してきた。しかし、進路に関して高校生が相談する相手は保護者のみとは限らない。例えば、家庭生活においては、家の中や近所にその他の家族もいるかもしれないし、親戚付き合いもあるだろう。また、学校に行けば、担任やその他の教師、クラスメートと進路に関わる話題が出ることもあるだろう。そこで、本研究では様々な関係性を持つ身近な他者を分析対象として持ち上げることにした。

大学進学という高校生にとって自分の将来に関わる重要なテーマについて、誰が相談相手となっているのだろうか。その点を明らかにするためには、異なる関係性を持つ他者との相談頻度という視点が重要だと思われる。本研究の目的は大学進学における様々な相談相手との相談頻度を分析することから、日中両国の高校生の進路選択プロセスにおけるステークホルダーの異同について明らかにすることを試みる。

## 2. 方法

本研究では質問紙調査法を用いて研究を行った。ここでは質問紙の構成、日中両国の調査実施状況について記述する。なお、調査は東北大学高度教養教育・学生支援機構で論理審査委員会の承認を受けて実施された。また、データの分析にはSPSS Statistics 25を用いた。

### 2.1 質問紙

#### 2.1.1 予備調査

日中両国に共通に使用できる質問紙を開発するため、著作権者の許可を得た上、倉元ほか（2017）の研究で用いられた質問紙を参考に、質問紙の開発を目的



とした予備調査を行った。

調査は、2018年8月～9月に、中国河南省鄭州市の二つの高校（普通高校と示範性普通高校）で、大学進学を目指している173名の高校生を対象として行われた（林・倉元, 2019）。日本語で開発された質問項目であったが、基本的に中国でも適用可能であることが確認された。言語や文化の問題を理由に利用に不適当と判断された項目はなかった。

### 2.1.2 質問紙の開発

本調査の質問紙は予備調査の質問紙を基本として、新たに調査項目を加える形で作成した。

予備調査で作成された中国語の質問紙を基に、翻訳の正確性と妥当性を確保するため、バックトランスレーション法を使って日本語バージョンを作成した。バックトランスレーション法のやり方は予備調査の中国語質問紙を日本語に訳し、その日本語訳を協力者が中国語に戻し（バックトランスレーション）、その後、もとの中国語と、バックトランスレーションされた中国語を比較した。翻訳者の一人は中国語を母国語とし、もう一人は日本語を母国語と同等に使用する者であった。いずれも日常的に日本語論文の通読や執筆を行い、翻訳に支障のない語学力を有していた。専門性について、二人の翻訳者が教育関係者であり、うち一人は日本の大学で助教として働いている。なお、予備調査の結果を参考に、一部、表現の修正を行った項目もある。

さらに、新たに加える項目については、中国の高校に勤務する現役教員と日本の高校に直近まで勤務経験がある複数の大学教員から助言を受け、日中の高校の状況に適する表現とするため、一部の項目の表現を修正した。日本語の本調査質問紙を基に同様のバックトランスレーション法を使い、中国語バージョンの本調査質問紙を作成した。一部の項目で状況に合わせて表現を変えたが、調査内容は同一である。

### 2.1.3 質問紙の概要

調査対象となる学年を区別するため、質問紙の冒頭に両国の学年暦に合わせて「2018年4月から2019年3月（日本）」「2018年9月から2019年7月（中国）」という調査対象となる時期に関する全般的な指示を示した。調査対象者のプロフィールとしては、「性別、学年」については選択式で回答を求めた。相談相手について

は、両国の高校生の生活実態に配慮して、調査対象者にとっての「父親」「母親」「兄弟姉妹」「その他の家族・親戚（祖父親母親も含む）」「高校教師」「家庭教師・塾・予備校」「先輩」「友人」という8つの対象（項目）を挙げることにした。相談頻度については、調査対象とした時期の「一年間」で進路について各相談相手と「相談した頻度」を「①1回もなかった」「②1～2回ぐらいあった」「③時々あった」「④頻繁にあった」の4段階評定として回答を得た。

なお、本調査の質問紙には、上記に記述した内容以外に学習時間、情報収集手段、大学入試の方式、進路決定要因なども含まれていたが、本論文の分析には用いていないため、本稿では記載を省略する。

## 2.2 日本調査

### 2.2.1 調査対象

日本調査は全国11校の高校生7,700名を対象に実施した。日本調査で最終的に得られた回答数（一部無効回答も含む）は1,089で、回答率14.1%であった。調査は事前に調査を担当する教員に協力の内諾を得た上で、高等学校長を通じて依頼した。調査協力校の層は、各地域におけるトップ校から中堅上位の進学校である。中村（2002）の格付け指標にしたがって分類すると、表1のようになる。Aが進学実績で上位、以下枝番も値の小さい方は進学実績が上位であることを示す。なお、中村（2002）の基準は、公式に認められた厳密な基準とは言えないが、同様の目的で用いられた先行研究が散見される（例えば、倉元・川又, 2002; 倉元, 2015）。

表1 調査協力校のプロフィール

高校	地方	高校種別	高校ランク
A 学校	東北地方	県立	B3
B 学校	東北地方	県立	B3
C 学校	中部地方	県立	B1
D 学校	中国地方	県立	A1
E 学校	近畿地方	県立	A1
F 学校	東北地方	県立	A1
G 学校	東北地方	県立	B1
H 学校	中部地方	県立	A1
I 学校	中部地方	私立	B2
J 学校	東北地方	市立	B1
K 学校	関東地方	都立	A1

### 2.2.2 調査時期

日本調査は2019年2～4月に行った。すなわち、日本では入学が4月であるため、1～3月に一般入試が行われる。さらに、推薦入試やAO入試は一般入試よりも早期に実施されるため、この時期は調査対象者のうち受験期を迎えた3年生が進学する大学を決定していく時期である。日中の一般入試と大学入学時期を表2に示す。

表2 日中一般入試と大学入学時期

	一般入試時期	入学時期
日本	1～3月	4月
中国	6月	9月

### 2.2.3 調査手続き

本調査はウェブ調査形式で実施した。

まず、グーグルフォームを用いて本調査の調査票をウェブ上に作成し、QRコードを生成した。次に、各高校に調査依頼を行い、調査担当の教員を通じて調査票のQRコードが掲載されている「研究協力のお願い」を調査対象者に配布した。調査対象者は任意の時間にアクセスして、回答を行った。生徒への説明や配布の仕方は各高校に任せることとした。

一人の生徒が重複して複数回答することを避けるため、生徒一人一人に配布した「研究協力のお願い」にはすべて異なるアルファベットと数字から構成された11桁の回答コードを付した。回答を記入する際には、最初に回答コードの入力が求められる。データ分析の前に、得られた回答で入力した回答コードと配布した回答コードリストを対照して、有効なコードが入力されているか否かを確認した。分析には有効回答コードが付けられたデータだけを使用することとした。

さらに、調査票の冒頭に調査の説明や倫理的配慮を説明する「研究同意書」を提示した。回答者は研究同意書を見て、「調査に協力する」と記載されたラジオボタンを押した場合に、回答画面に移行する仕組みとした。

## 2.3 中国調査

### 2.3.1 調査対象

調査は中国河南省<sup>5)</sup>における6校の高校生419名を対象に実施した。中国調査で最終的に得られた回答数

(一部無効回答も含む)は371で、回答率88.5%であった。ここでは、調査協力校のレベルを説明するため、河南省教育庁が公表した示範性普通高校という指標を使うこととする。調査協力校のレベルを表3に示す。

最初に普通高校について説明する。普通高校とは、「高等専門学校(高専)」や「技術専門学校」などの学校と区別される、中国における全日制の高級中等教育段階の普通高級中学校を意味する。略して普通高校と呼ばれている。示範性普通高校は、河南省教育庁(The Education Department OF Henan Province)が2005の秋から開始した、普通高校の全体的な教育水準と義務教育の質の保証や向上のために設定した制度である。

表3 調査協力校のプロフィール

高校	高校種別	高校ランク
A 学校	公立	示範性高校
B 学校	公立	示範性高校
C 学校	私立	普通高校
D 学校	公立	示範性高校
E 学校	公立	普通高校
F 学校	公立	示範性高校

以上、日中両国で調査対象となった高校は、大学進学や学力を指標として表現すれば、各地域の上位から中位レベルの進学校とみなされる高校であり、総体的に見ると、両国の調査対象の社会的な位置づけには本質的な違いはないと考えてよい。

### 2.3.2 調査時期

中国における本調査は2019年6～8月に実施した。中国では、高考の成績が確定して受験生に通知されるのは6月末である。河南省における大学への出願期間は7月中旬までである。本調査の実施時期は、大半の3年生の進路が決まりつつあり、かつ、他の学年の生徒は新年度を迎える直前の時期であった。すなわち、学年暦の上で日本調査と同等の意味を持つ時期である。

### 2.3.3 調査手続き

中国調査も日本調査と同様にウェブ調査形式を用いて行った。中国におけるインターネット調査サイト「問卷星(wènjuǎnxíng)」を使い、本調査の調査票をウェブ上に作成し、QRコードを生成した。中国在住の協力者を通じてQRコードを調査に協力する高校教員に

知らせ、教員から調査対象となる生徒にSNSを通じて調査を依頼した。日本調査と同様、生徒が任意の時間にアクセスして、QRコードを入力し、調査票に回答を記入する方法をとった。まず、教員に対して調査の主旨など説明した上で、各先生が担当しているクラスのウィーチャット（Wechat）グループにQRコードを送信した、生徒への説明は各協力者に任せることにした。

回収率を計算するには、協力した高校教員を通じてチャットグループに参加している生徒の総人数を尋ねた。日本調査とは異なり、一人ひとりへの回答コードの配付は行わなかった。その代わりに、一人の生徒が複数回答することを避けるため、協力教員に対して「QRコードを配布する時は生徒に『複数回答はしないでください』」という指示を出すように依頼した。

また、日本調査と同様に、調査票の冒頭に調査の説明や倫理的配慮を説明する「研究同意書」を提示した。回答者は研究同意書を見て、「調査に協力する」と記載されたラジオボタンを押した場合に、回答画面に移行する仕組みとした。

### 3. 結果

#### 3.1 有効回答者数

本論文で分析に用いた項目は、国、学年、性別、と相談頻度である。データクリーニングを実施して不適な回答を除去した後の中国の有効回答者数は192、日本の有効回答者数は1,019であった。性別、学年の度数を表4に示す。

表4 性別と学年の度数表

		国		合計
		中国	日本	
性別	男子	71	440	511
	女子	121	578	699
学年	1年生	48	437	485
	2年生	58	423	481
	3年生	86	159	245

注：無回答を除く

#### 3.2 基礎分析

相談相手の8項目「父親」「母親」「兄弟姉妹」「その他の家族・親戚」「高校教師」「家庭教師・塾・予備

校」「先輩」「友人」との相談頻度の回答は先述の通り4段階であったが、分析の段階ではこれらの項目を等間隔の間隔尺度とみなすこととした。

すなわち、各相談相手について「1回もなかった」を「1」、「1～2回ぐらいあった」を「2」、「時々あった」を「3」、「頻繁にあった」を「4」と得点化して分析を行った。以上の得点化方式の結果、得点が高いほど、相談頻度が高い傾向にあると解釈される。日本調査の項目得点の平均値を表5に示す。「母親」との相談頻度が最も高く、唯一、項目平均値が「3」を超えた。中国の項目得点の平均値を表6に示す。日本調査とは対照的に、中国で相談頻度が一番高いのは「友人」であった。

表5 相談頻度の平均と標準偏差（日本）

相談相手	度数	平均値	標準偏差
母親	1017	3.04	0.86
高校教師	1010	2.52	0.86
友人	1009	2.46	1.01
父親	1002	2.30	1.02
家庭教師・塾・予備校	994	1.66	1.01
先輩	999	1.53	0.82
兄弟姉妹	985	1.52	0.86
その他の家族・親戚	996	1.44	0.76
有効回答者数	968		

表6 相談頻度の平均と標準偏差（中国）

	度数	平均値	標準偏差
友人	192	3.06	0.99
母親	192	2.92	1.05
父親	192	2.61	1.08
兄弟姉妹	192	2.41	1.14
高校教師	192	2.14	1.08
先輩	192	2.02	1.04
その他の家族・親戚	192	1.85	0.92
家庭教師・塾・予備校	192	1.71	0.97
有効回答者数	192		

#### 3.3 日中比較

次に、それぞれの相談相手との相談頻度が「国」「性別」「学年」によって異なるか否かについて検討した。各相談相手について、それぞれ「国」「性別」「学年」

を要因とする3要因分散分析を行った。その結果、全ての項目に関して2次交互作用は見られなかった。各項目に関する3要因分散結果で有意な結果が得られた部分を表7で示す。なお、表7の記載順は調査票に準じる。

表7 各相談相手の3要因分散分析結果

項目	変動因	SS	DF	MS	F
父親	国	10.83	1	10.83	10.223***
	国×学年	7.20	2	3.60	3.397**
	誤差	1251.51	1181	1.06	
母親	国	6.29	1	6.29	8.216**
	性別	23.93	1	23.93	31.242***
	学年	14.36	2	7.18	9.371***
	国×性別	5.35	1	5.35	6.985**
	誤差	916.24	1196	0.77	
兄弟姉妹	国	96.93	1	96.93	119.964***
	学年	11.79	2	5.90	7.296***
	国×学年	13.94	2	6.97	8.625***
その他の家族・親戚	国	18.37	1	18.37	30.249***
	性別	4.45	1	4.45	7.324**
	学年	5.09	2	2.54	4.188*
	誤差	713.52	1175	0.61	
高校教師	国	42.54	1	42.54	55.797***
	学年	49.76	2	24.88	32.636***
	国×性別	3.57	1	3.57	4.687*
	国×学年	6.63	2	3.32	4.349*
	誤差	906.45	1189	0.76	
家庭教師・塾・予備校	学年	7.05	2	3.53	3.532*
	国×学年	8.89	2	4.45	4.454*
	誤差	1170.73	1173	1.00	
先輩	国	36.13	1	36.13	49.907***
	学年	7.24	2	3.62	5.002**
	国×学年	6.49	2	3.24	4.48*
	誤差	852.85	1178	0.72	
友人	国	38.69	1	38.69	39.832***
	性別	24.84	1	24.84	25.574***
	学年	20.98	2	10.49	10.801***
	性別×学年	8.87	2	4.43	4.564*
	誤差	1153.85	1188	0.97	

\*P<.05 \*\*P<.01 \*\*\*P<.001

### 3.3.1 「母親」

「母親」について、「国」「性別」「学年」の主効果が全て有意であった。また、「国」と「性別」の1次交互作用が有意であった(表7)。「母親」の学年別平均値を表8に示す。学年の主効果についてシェッフエ法による多重比較(MSe=.766,5%水準)を行った。2,3年生と1年生の間に有意な差がみられた。2,3年生は1年生より頻繁に母親と相談する傾向がみられた。

次に、「国」と「性別」の1次交互作用について、単純主効果検定を行った。結果を表9に示す。

表8 「母親」の学年別平均値

	平均値	標準偏差
1年生	2.91	0.88
2年生	3.05	0.87
3年生	3.17	0.96

表9 「母親」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 男子	0.12	1	0.12	0.157
国 at 女子	10.186	1	10.186	13.297***
性別 at 中国	0.003	1	0.003	0.004
性別 at 日本	27.588	1	27.588	36.012***
誤差	916.244	1196	0.766	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

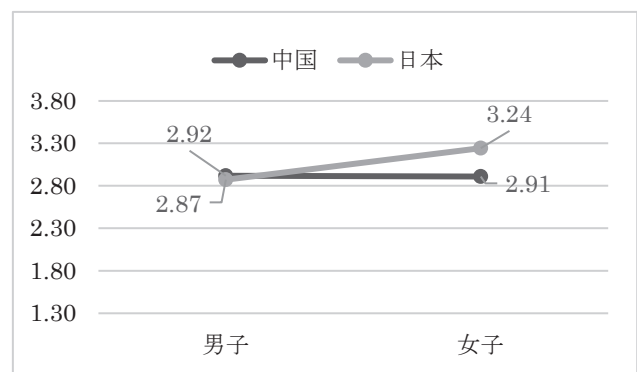


図1 「母親」の推定周辺平均 (国×性別)

「母親」の推定周辺平均値を図1に示す。「国」の単純主効果は女子において有意な結果がみられた。日本の女子生徒が中国の女子生徒より頻繁に母親と相談する傾向が見られた。「性別」の単純主効果は日本において有意な結果が見られた。日本国内においては、女



子生徒のほうが男子生徒よりも頻繁に母親と相談する傾向が見られた。

### 3.3.2 「高校教師」

「高校教師」について、3要因の分散分析の結果、「国」の主効果、「学年」の主効果が有意であった（表7）。また、「国」と「性別」の1次交互作用、「国」と「学年」の1次交互作用が有意であった。単純主効果検定の結果を表10に示す。

表10 「高校教師」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 1 年生	1.671	1	1.671	2.192
国 at 2 年生	10.321	1	10.321	13.538***
国 at 3 年生	29.225	1	29.225	38.335***
学年 at 中国	2.525	2	1.263	1.656
学年 at 日本	51.719	2	25.859	33.92***
国 at 男子	5.432	1	5.432	7.126**
国 at 女子	36.666	1	36.666	48.095***
性別 at 中国	3.155	1	3.155	4.138*
性別 at 日本	0.545	1	0.545	0.714
誤差	906.45	1189	0.762	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

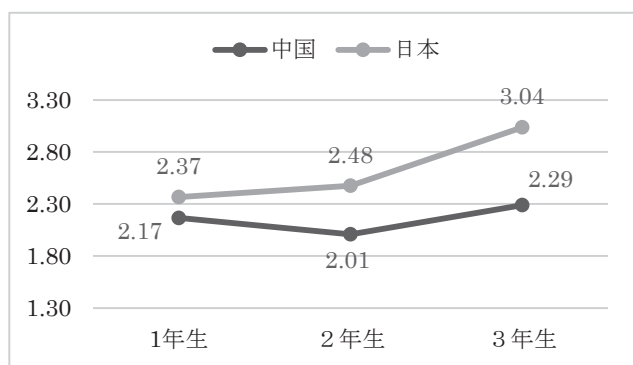


図2 「高校教師」の推定周辺平均 (国×学年)

図2に「高校教師」の推定周辺平均を示す。「国」の単純主効果は2, 3年生の群で有意な結果が見られた。日本の2, 3年生は中国の2, 3年生より頻繁に高校教師と相談する傾向が見られた。「学年」の単純主効果は日本において有意であった。シェッフエ法による多重比較 (MSe=.762,5% 水準) を行ったところ、日本では3年生が1, 2年生よりも有意に高校教師と

頻繁に相談する傾向が見られた。

「国」の単純主効果は男子群, 女子群両方とも有意であった。図3は「高校教師」の国と性別の推定周辺平均を示している。男女問わず、日本の高校生が中国の高校生よりも頻繁に「高校教師」と相談する傾向が見られた。「性別」の単純主効果は中国において有意であった。中国の男子生徒は女子生徒より頻繁に高校教師と相談する傾向が見られた。

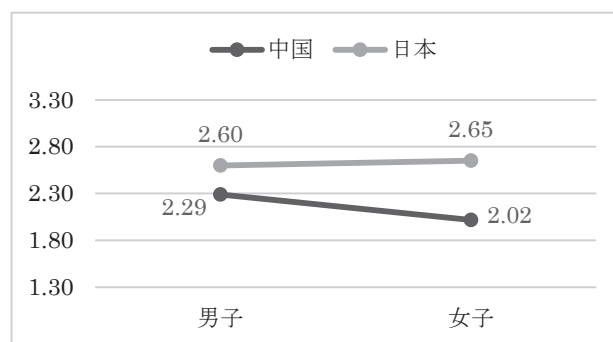


図3 「高校教師」の推定周辺平均 (国×性別)

### 3.3.3 「友人」

「友人」について、3要因の分散分析の結果、「国」の主効果、「性別」の主効果、「学年」の主効果が有意であった（表7）。また、「性別」と「学年」の1次交互作用が有意であった。「国」の主効果について、平均値を比較した結果、中国の高校生 (M=3.06, SD=0.99) は日本 (M=2.46, SD=1.01) の高校生より頻繁に「友人」と相談する傾向がみられた。

「性別」と「学年」の1次交互作用について、単純主効果検定を行った結果を表11に示す。

「友人」の推定周辺平均を図4に示す。「性別」の単純

表11 「友人」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
性別 at 1 年生	2.392	1	2.392	2.463
性別 at 2 年生	0.415	1	0.415	0.427
性別 at 3 年生	13.202	1	13.202	13.593***
学年 at 男子	2.041	2	1.021	1.051
学年 at 女子	11.378	2	5.689	5.858**
誤差	1251.5	1181	1.06	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001



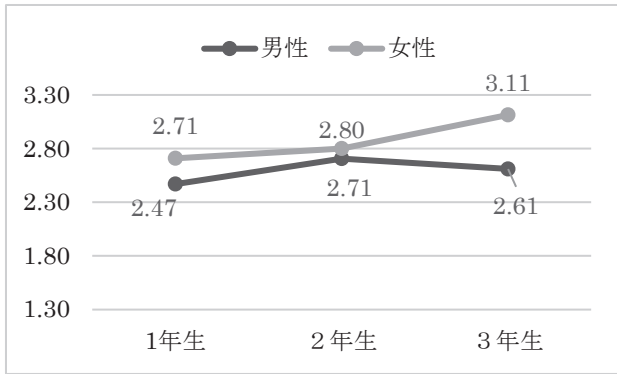


図4 「友人」の推定周辺平均 (国×学年)

主効果は3年生群において有意であった。平均値を比較したところ、3年生群では、女子生徒が男子生徒よりも頻繁に「友人」と相談する傾向が見られた。「学年」の単純主効果は女子群で有意であった。「学年」の単純主効果に関して、シェッフエ法による多重比較 (MSe=.971, 5%水準) を使い、検定を行った。女子生徒の場合、3年生になると、「友人」と相談する頻度が高くなっていた。

### 3.3.4 「父親」

「父親」について、3要因の分散分析の結果、「国」の主効果、「国」と「学年」の1次交互作用が有意であった (表7)。単純主効果検定の結果を表12に示す。

表12 「父親」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 1年生	13.011	1	13.011	12.278***
国 at 2年生	0.005	1	0.005	0.005
国 at 3年生	4.901	1	4.901	4.625*
学年 at 中国	5.487	2	2.743	2.589
学年 at 日本	4.85	2	2.425	2.288
誤差	1251.5	1181	1.06	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

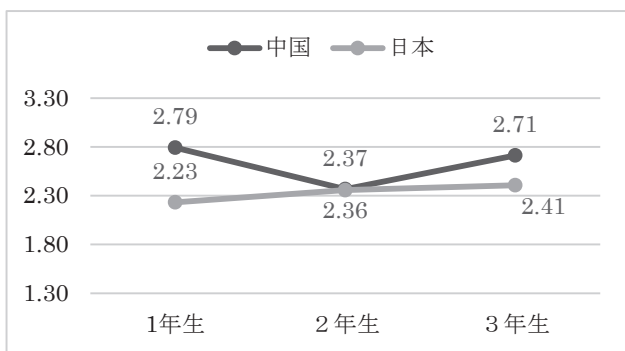


図5 「父親」の推定周辺平均 (国×学年)

図5に「父親」の推定周辺平均を示す。「国」の単純主効果は1年生と3年生において有意な結果がみられた。中国の1, 3年生は日本の1, 3年生よりも頻繁に父親と相談する傾向が見られた。「学年」の単純主効果は有意な結果が見られなかった。

### 3.3.5 「兄弟姉妹」

「兄弟姉妹」について、3要因の分散分析を行った結果、「国」の主効果、「学年」の主効果が有意であった (表7)。また、「国」と「学年」の1次交互作用が有意であった。次に、「国」と「学年」単純主効果検定を行った。結果を表13に示す。

表13 「兄弟姉妹」の単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 1年生	12.32	1	12.32	15.248***
国 at 2年生	18.652	1	18.652	23.084***
国 at 3年生	80.242	1	80.242	99.312***
学年 at 中国	22.996	2	11.498	14.23***
学年 at 日本	1.884	2	0.942	1.166
誤差	940.49	1164	0.808	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

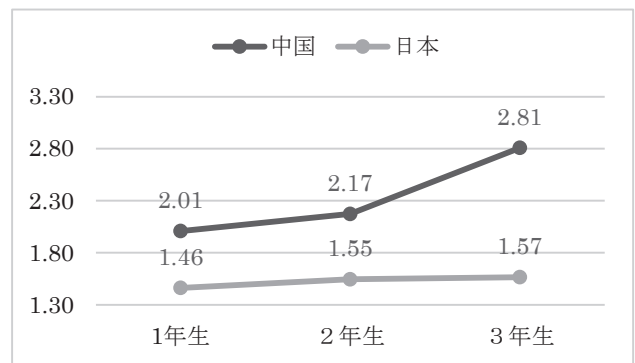


図6 「兄弟姉妹」の推定周辺平均 (国×学年)

図6は「兄弟姉妹」の推定周辺平均を示している。「国」の単純主効果は全学年において有意であった。全般的に中国の高校生は日本の高校生よりも頻繁に「兄弟姉妹」と相談する傾向が見られた。「学年」の単純主効果は中国において有意であった。シェッフエ法による多重比較 (MSe=.808, 5%水準) を行ったところ、中国の3年生が1, 2年生よりも有意に「兄弟姉妹」と頻繁にと相談する傾向が見られた。一方、日本のデータでは、「学年」の単純主効果は有意ではなかった。

### 3.3.6 「先輩」

「先輩」について、「国」の主効果、「学年」の主効果が有意であった(表7)。「国」と「学年」の1次交互作用も有意であった。単純主効果検定の結果を表14に示す。

表14 「先輩」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 1年生	6.205	1	6.205	8.57**
国 at 2年生	2.872	1	2.872	3.967*
国 at 3年生	30.211	1	30.211	41.728***
学年 at 中国	4.485	2	2.243	3.097*
学年 at 日本	9.475	2	4.738	6.544**
誤差	852.85	1178	0.724	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

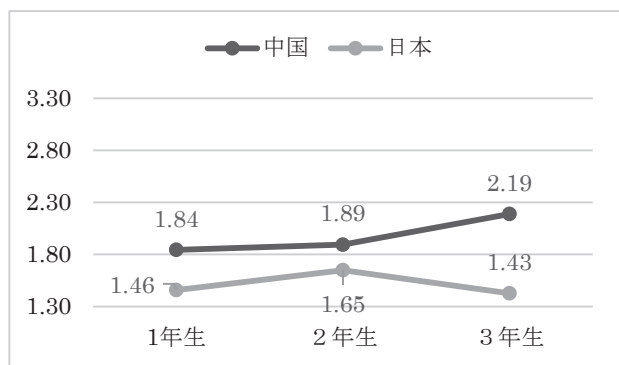


図7 「先輩」の推定周辺平均 (国×学年)

「先輩」の推定周辺平均を図7に示す。「先輩」については、「国」の単純主効果は全学年において有意であった。全般的に中国の高校生は日本の高校生よりも頻繁に相談する傾向が見られた。「学年」の単純主効果も両国において有意であった。シェッフェ法による多重比較(MSe=.724, 5%水準)を行った結果、中国においては、3年生が1, 2年生より頻繁に先輩と相談していたのに対し、日本では、2年生が他の学年の学生よりも先輩と頻繁に相談する傾向が見られた。

### 3.3.7 「その他の家族・親戚」

「その他の家族・親戚」という項目は「国」「性別」「学年」の主効果が有意であった。すべての要因において1次交互作用はみられなかった(表7)。

「その他の家族・親戚」の平均値を表15に示す。中国の高校生が日本の高校生より有意に「その他の家族・親戚」と頻繁に相談する傾向が見られた。「性別」に

表15 「その他の家族・親戚」の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
中国	1.85	0.92
日本	1.44	0.76
男子	1.43	0.74
女子	1.57	0.84
1年生	1.45	0.73
2年生	1.46	0.77
3年生	1.71	0.94

ついて、女子のほうは男子より頻繁に相談する傾向がみられた。「学年」についてシェッフェの方法による多重比較(MSe=.607,5%水準)を行った結果、3年生は1, 2年生より頻繁に「その他の家族・親戚」と相談する傾向が見られた。

### 3.3.8 「家庭教師・塾・予備校」

「家庭教師・塾・予備校」について、3要因の分散分析では、「学年」の主効果が有意であった(表7)。また、「国」と「学年」の1次交互作用が有意であった。単純主効果検定の結果を表16に示す。

表16 「家庭教師・塾・予備校」単純主効果検定結果

変動因	SS	DF	MS	F
国 at 1年生	4.346	1	4.346	4.354*
国 at 2年生	0.789	1	0.789	0.791
国 at 3年生	4.114	1	4.114	4.122*
学年 at 中国	3.847	2	1.924	1.927
学年 at 日本	13.726	2	6.863	6.876**
誤差	1170.7	1173	0.998	

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

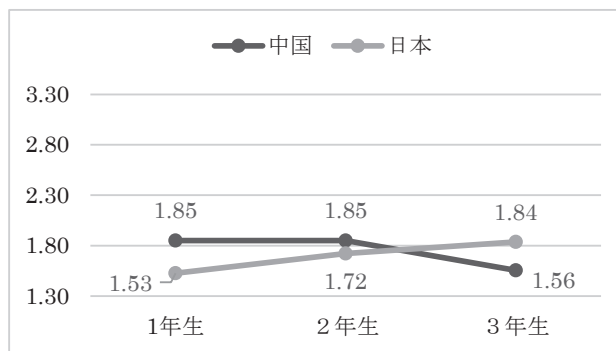


図8 「家庭教師・塾・予備校」の推定周辺平均 (国×学年)

「家庭教師・塾・予備校」の推定周辺平均を図8に示す。「家庭教師・塾・予備校」については、「国」の単純主効果は1, 3年生において有意であった。以下に述べるように学年によって様相が異なり、全体としては「国」の主効果は相殺されていた。

1年生では、中国の高校生が日本の高校生より頻繁に「家庭教師・塾・予備校」と相談する傾向が見られた。3年生になると、逆に日本の高校生が中国の高校生よりも、「家庭教師・塾・予備校」と頻繁に相談する傾向が見られた。

学年の単純主効果は、日本においてのみ有意であった。日本においては、学年による群間差について、シェッフェ法による多重比較(MSe=.998,5%水準)を行った結果、2, 3年生が1年生より「家庭教師・塾・予備校」と頻繁に相談する傾向が見られた。

## 4. 考察

本研究は日中高校生の大学進学における様々な相談相手との相談頻度を調査し、両国高校生の進路選択プロセスにおける相談相手の異同について分析を行った。全部の相談相手については、日中両国の差が見られた。

### 4.1 日中における相談相手の異同

#### 4.1.1 日中の違い

まず、「友人」「父親」「兄弟姉妹」「先輩」「その他の家族・親戚」という相談相手について、中国の生徒は日本の生徒より頻繁に相談する傾向が見られた。

一方、「母親」「高校教師」になると、逆の傾向がみられた。日本の女子は中国の女子より頻繁に「母親」と相談する傾向が見られた。この結果については、日中両国における親子関係の差や親との相談話題の差が背景要因として挙げられる可能性があるが、本研究のデータからは分からない。具体的な理由に関してさらに検討するには、裏付けとなる資料を集める必要があるだろう。

さらに、「高校教師」に関して、総体的に日本の相談頻度が高いということが明らかになった。特に日本の2, 3年生は中国の2, 3年生より、男女問わずより頻繁に「高校教師」と相談する傾向が見られた。理由として考えられるのは、日本における進路指導体制の充実である。1.1で説明したように、日本では各高校の

組織形態には異同があるが、基本的に、各高校には進路指導を担当する組織が校務分掌として存在するのが一般的である。一方、中国の高校では進路指導を担当する校内組織は存在しない。中国の高校生が相談する「高校教師」とは、おそらく、担任がほとんどであろう。親切に相談に乗ってくれる場合は良いが、進路相談が職務の一部として認識されているか否かは個人差があるだろう。中国の高校で進路に関する指導は十分ではないとの指摘もある(胡・村上, 2009)。いきおい、中国においては、進路は学校で相談することというよりは、家族や身近にいる方と相談する事項であると認識されているのが一般的である。ただし、胡・村上の研究は職業選択に関する研究なので、本研究とは調査対象の母集団が異なることには注意が必要である。

「家庭教師・塾・予備校」について、中国の1年生は日本の1年生よりも頻繁に相談する傾向がある。3年生になると、結果が逆になり、日本の生徒の方が中国の生徒よりも、より頻繁に相談するようになる。この結果には、背景として日中の高校におけるカリキュラムの違いが反映しているように思われる。日本においては、1年生の時には、科目の勉強の他に部活動などが熱心に行われており、進学に向けての意欲も十分には熟していない。3年生になると必修科目や部活に費やす時間が少なくなり、塾に通う時間的余裕が生まれる。したがって、塾に通う生徒は高学年になるにつれて増えていくと言われている。中国では、逆に、3年生になると高校にいる時間が長くなるのが一般的であり、塾に通う時間的余裕は高学年になるにつれて、失われていく。

#### 4.1.2 性別と学年による日中の類似点

性別と学年について、下記の相談相手項目で日中には同様な特徴が得られた。

性別による差異は「友人」「その他の家族・親戚」の2項目で見られた。両国において、女子生徒のほうが男子生徒より頻繁に相談する傾向が見られた。

学年による差異は「母親」「友人」「その他の家族・親戚」で見られた。全体的に高学年の生徒は低学年の生徒より頻繁に相談する傾向が見られた。文化や入試制度などの差異はあるとしても、両国高校生は学年が上がるにつれて、真剣に大学選択を悩んでいるため、



頻繁に他人と相談することが推測できる。

## 4.2 日中両国における相談相手の特徴とその背景要因

### 4.2.1 日本における相談相手の選択と背景要因

日本の場合、「母親」に関しては、女子生徒が男子生徒より頻繁に相談する傾向が見られた。これは一般社団法人全国高等学校PTA連合会2019年の調査と同一結果が得られた。この点に関しては、男女の性格差異が背景要因の一つである可能性が考えられる。水本(2018)の研究では子が捉える親との関係について「精神的自立」と「親密性」から捉え、それらの父息子・父娘・母息子・母娘関係の差を明らかにした。結果、娘が捉える母親との関係は、他の組み合わせの親子関係と比較して信頼関係が高く、親密性が総じて高かった。これは女子高校生が母親との相談頻度が高い背景要因になる可能性があると考えられる。

学年については、日本の3年生は1, 2年生よりも有意に「高校教師」と頻繁に相談する傾向が見られた。また、2, 3年生が1年生よりも「家庭教師・塾・予備校」と頻繁に相談する傾向が見られた。

「高校教師」と「家庭教師・塾・予備校」に関して、1年生の進学意識はまだ希薄であるが、2年生になると、文理選択の結果としての進路が現実味を帯び、具体的な大学選択を考え出すことになる。自然に生徒の意識が高まってくるのが考えられる。一方、3年生は、最後の段階で自分の選択を確かめるため、頻繁に先生と相談する傾向があるのではないだろうか。

「先輩」については、2年生は3年生よりも頻繁に相談する傾向が見られた。理由として、3年生は学校内で先輩と接触する機会が少ないため、2年生のほうが先輩と相談する頻度が高いことが背景要因になる可能性があると考えられる。

### 4.2.2 中国における相談相手の選択と背景要因

中国の場合、3年生が1, 2年生よりも有意に「兄弟姉妹」と頻繁に相談する傾向が見られた。さらに、2, 3年生は1年生よりも頻繁に「先輩」と相談する結果であった。この理由は、日本と同様に、1年生の進学意識が希薄で、2, 3年生になると、進学意識が自然に高まってくるのが考えられる。

性別については、中国の男子生徒は女子よりも頻繁に「高校教師」と相談している。この結果については、進路指導制度の不備と男女の性格特性の差が背景要因として挙げられる可能性がある。中国の高校では進路指導の仕組みはないため、日本のように生徒全員が進路について教師と相談する機会は設けられていないのが普通である。高校教師との相談は生徒の自発的行動である。男子生徒は女子生徒より大胆で、自ら先生のところに相談しに行くとしても、女子の場合は、自分から先生へ質問するが恥ずかしくてできないことがあるのではないだろうか。

## 4.3 日中の高校生が選択する相談相手

大学進学場面における日中両国高校生が選択した相談相手には違いが見られた。相談頻度について、得点「1」の定義は「1回もなかった」である。したがって、平均値が「2」以下の項目は、相談相手として選ばれる頻度は高くないと言える。

日本調査で平均値が「2」を超えた項目の中では、「母親」が一番頻繁に相談する相手として選ばれた。次は「高校教師」「友人」「父親」の順である。測上(1984)の研究で大学進学の人的影響源として、「父親」「教師」「母親」「友人」の順で出現頻度が高かった。測上(1984)の研究では生徒の大学進学志望動機はどのような人から影響を受けながら形成されたかについて調査を行った。本研究では生徒の大学進学における様々な相談相手との相談頻度について尋ねた。本研究と測上の研究が聞いたことは微妙なニュアンスの違いがある。一方、中国では「友人」「母親」の順位が高く、次いで「父親」「兄弟姉妹」「高校教師」「先輩」であった。上記以外の相手は相談相手として選ばれる頻度は高くない。

ところで、大学進学の相談相手としては選ばれる頻度は低い、「その他の家族・親戚」で誰を思い浮かべるかは、日中で違いがあったようだ。林・倉元(2021)の研究では本稿で分析したデータを用いて、クラスター分析で相談傾向のタイプ分類を行った。結果、中国においては、「その他の家族・親戚」と「高校教師」群が近い関係を持つが、日本では、「その他の家族・親戚」は「兄弟姉妹」群と近い関係を持つ。一つの推測だが、ここには文化的な違いが見られることが考え

られる。中国では、大学を選択する活動は「家族」にとって大きな決断であり、親戚の中の権威者である大学の教員ないしは教育関係者の意見を求める傾向があることが推測できる。一方、日本では「その他の家族・親戚」は「いとこ」と理解された可能性がある。大学進学について誰を相手に相談するか、という側面に限っても、日常生活では意識に上らない文化的な違いが調査によって浮き彫りになった。

#### 4.4 今後の課題と展望

本研究には課題としては、調査項目の不足が挙げられる。相談相手の中に「家庭教師・塾・予備校」「兄弟姉妹」という項目が存在したにもかかわらず、実際に、塾へ通っているかどうか、兄弟姉妹がいるかどうか、という質問項目が含まれていなかった。今後、これらの項目を補って調査をする必要がある。

また、中国調査における有効回答者数が日本調査と比較して少なかったことが調査手法における課題として挙げられる。日本調査では、正式的に学校を通じて調査の依頼をしたため、回収率は低かったが調査に協力した生徒は真面目に回答した可能性が高い。一方、中国調査では、チャットグループを通じた依頼であったため、生徒は回答を断るのではなく、いい加減な回答をして調査に協力をしたふりをした者が多かったと考えられる。

本稿では、主に相談相手との相談頻度を中心に検討したが、具体的な相談内容については触れていない。大学選択のプロセスの中では、自分の興味関心、将来の職業、現在の成績、大学への合格可能性など様々な要素が関与しているが、これらの話題を誰と話しているのかについても検討する価値がある。さらに、日中の高校生がどのような方法で大学の情報を集め、どのような要因を重視して進路を決めているのか、解明すべき要因は多い。

今後は、本稿で分析し残したこれらの点を詳細に調べることが課題である。

なお、本研究は、基本的に大学進学を進路の前提とする、いわゆる上位から中位レベルの進学校を対象としたものである。進路多様校が教育困難校の実情は異なったものがあるだろう。したがって、より一般的に

日中の高校生の進路選択を研究課題とするならば、より幅広い高校生を対象として、調査を行う必要があるだろう。

#### 謝辞

本研究の日本調査はJSPS科研費JP16H02051の助成に基づく研究成果の一部である。中国調査はJSPS科研費19H05491の助成に基づく研究成果の一部である。

#### 注

- 1) 調査当時. 令和3 [2021] 年度入試から一般選抜.
- 2) 調査当時. 令和3 [2021] 年度入試から学校推薦型選抜. なお、導入当時は推薦入学.
- 3) 調査当時. 令和3 [2021] 年度入試から総合型選抜.
- 4) 中国の共通試験は高考である。日本の共通試験は調査当時大学入試センター試験、令和3年度入試から大学入学共通テストである。
- 5) 河南省は中国の中部にある。2020年国勢調査によれば、河南省の人口数は全国3位で、9,605万である。2019年国民経済と社会発展統計広報によれば、河南省2019年のGDPは54,259.20億元であり、全国5位である。

#### 文献

- 測上克義 (1984) 「大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究」, 『教育心理学研究』 32巻3号, pp. 228-232
- 胡琴菊・村上隆 (2009) 「中国の高校生における職業興味尺度の構成」, 『キャリア教育研究』 27, pp. 35-42.
- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査 (2019) 「高校生と保護者の進路に関する意識調査」第9回報告書.
- 石井光夫 (2020) 「東アジアの大学入試改革－多様化と『基礎学力』保証の両立は可能か－」, 宮本友弘『変革期の大学入試』金子書房, pp. 165-186.
- 倉元直樹・川又政征 (2002) 「高校調査書の研究- [学習成績概評A] の意味-」, 『大学入試研究ジャーナル』 12, pp. 91-96.
- 倉元直樹・小松恵・宮本友弘 (2017) 「看護専門学校への

- 進路選択理由:東北地方中核都市に立地するA校における5年間の変化」,『大学入試研究ジャーナル』27,pp. 129-134.
- 倉元直樹・泉毅 (2014)「東北大学工学部AO入試受験者にみる大学入試広報—その意義と発信型, 対面型広報の効果—」『日本テスト学会誌』No. 10, pp. 125-146.
- 倉元直樹 (2015)「大学入学者選抜における高校調査書」,『教育情報学研究 (東北大学大学院教育情報学研究部・教育部紀要)』第14号, pp. 1-13.
- 倉元直樹・尹得霞 (2020)「中国の大学入試政策—韓国, 台湾, そして, わが国における高大接続改革との関連性を中心に—」,『全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会』第15回研究発表予稿集.
- 卢雪松・杨倩・鲁焯・汤苏扬 (2008)「专业选择的影响因素与专业满意度关系的研究」,『高教高职研究』12月号下旬刊, pp. 202-203.
- 李建平 (2003)「关注高中课程改革系列报道」,『课程改革文献选介』pp. 118-130.
- 林如玉・宮本友弘・倉元直樹 (2019)「大学進学における進路選択プロセスに関する研究——進路決定因子と相談相手を中心に——」,『日本テスト学会第17回大会発表論文集』, pp. 156-159.
- 林如玉・倉元直樹 (2019)「高校生の進路探究プロセスに関する研究——中国鄭州市を例として——」,『日本教育心理学会第61回総会発表論文集』, pp. 555.
- 林如玉・倉元直樹 (2020)「大学進学における進路選択プロセスに関する研究—日本高校生の情報収集活動を中心に—」,『日本教育心理学会第62回総会発表論文集』pp. 77.
- 水本深喜 (2018)「青年期後期の子の親との関係—精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—」『教育心理学研究』66巻2号, pp. 111-126
- 日本文部科学省 (2018)『平成30年度学校基本調査』, 日経印刷.
- 中村忠一 (2002)『エリートへの道は中学. 高校選びで決まる』, エール出版社.
- 臨時教育審議会 (1988)『教育改革に関する答申—臨時教育審議会第一次～第四次 (最終) 答申—』, 大蔵省印刷局.
- Trow. M. (1973) 天野郁夫・喜多村和之訳 (1976)『高等教育社会の大学エリートからマスへ』, 東京大学出版会.
- 寺下榮・村松毅 (2009)「東海・北陸地区国立大学—入試広報の取組—エリア別志願者の受験行動に関する調査」『大学入試研究ジャーナル』19, pp. 145-150.
- 高橋彩 (2009)「女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連」,『パーソナリティ研究』17 (2), pp. 208-219.
- 尤斌 (2014)「大学形象与高中生择校研究」,『Doctoral dissertation』, 华东师范大学.
- 中国国家统计局 (2018)『2018年中国教育统计年鉴』, 中国统计出版社.
- 中华人民共和国国务院 (2014).「国务院关于深化考试招生制度改革的实施意见 国发〔2014〕35号」, [http://www.gov.cn/zhengce/content/2014-09/04/content\\_9065.htm](http://www.gov.cn/zhengce/content/2014-09/04/content_9065.htm) (閲覧2021/1/29)